

第5章 「小さな博物館」の経過

この章では、1993年時点で開館していた23館の1993年から2005年までの経過についてまとめる。

5-1 各博物館の現状

1993年の調査時には、23館の博物館が開館していた。その23館のうち、14館は現在（2005年）も継続中であり、5館で館長の世代交代を経験している。他の9館は会社の倒産や後継者不在等の理由で閉館していた。

以上のような博物館の現状から、表5-1のように分類し、分類項目ごとにその現状に至るまでの経過を詳細にまとめる。なお、店舗改装中につき休館している鈴木木工博物館、及び閉館した博物館の一部に関しては、詳細な情報が得られなかった。

表5-1 博物館の現状からみた分類

分類項目		博物館名	略称
継 続	館長継続	木造建築資料館	木造建築
		古伊万里資料館	古伊万里
		羽子板資料館	羽子板
		能面博物館	能面
		べっ甲資料館	べっ甲
		木彫資料館	木彫
		相撲写真資料館	相撲写真
		足袋資料館	足袋
		建築道具・木組資料館	建築道具
	館長交代	軟式野球資料室	軟式野球
		小林人形資料館	小林人形
		合金鋳物博物館	合金鋳物
		乾燥木材工芸資料館	乾燥木材
		金庫と鍵の博物館	金庫と鍵
閉 館		千社札博物館	千社札
		タキナミグラス博物館	タキナミ
		NTT ぶりきのおもちゃ博物館	ぶりき
		はんこ資料館	はんこ
		ライター博物館	ライター
		石材資料館	石材
		硝子の本の博物館	硝子の本
		伝統木彫刻資料館	伝統木彫刻
休 館		鈴木木工博物館	鈴木木工

5-1-1 館長継続型の経過

(1) 具体的な事象の変化

展示方法や展示内容に関しては、古伊万里資料館や羽子板資料館、能面博物館、相撲写真資料館では展示物を新しく収集したものや館長自身の新しい作品への更新が見られた。また、木造建築資料館と木彫資料館では工場や店舗の改築と併せて、展示スペースの大幅な改築があった。べっ甲資料館と足袋資料館では特に変更点はなかった。

開館日や開館時間に関しては、生活の都合上変更を行った能面博物館の他は開館当初から変更なく継続している。

(2) 館長意識の変化の傾向

館長継続型に当てはまる9館の傾向について、館長のコメントからまとめる。

93年では、「仕事に対して誇りを持った。見に来てくれることがうれしい。(建築道具:93)」といった誇り・自信に関するコメントや、「口コミで次回はうちも、と注文が増えた。(能面:93)」といった実質効果を表すコメントが多く読み取れたが、一方で、05年には、「自分で宣伝するわけじゃないから信頼してもらえる。公園でも出張博物館はすごい宣伝効果がある。(建築道具:05)」といった宣伝効果に関するコメントや、「顔を見たり話をしたりするのはうれしい。(能面:05)」といった交流愉快に関するコメントが見られる。

来館者との交流に対しては、「少しでも次世代に分かっていただければ(建築道具:05)」や「羽子板の歴史を話すことは社会に対しての勤め。私の使命。(羽子板:05)」というように自己満足のために博物館を運営している館長がおり、館長によって博物館にかける思いは多様である。来館者と交流してトクしたこととしては、純粋に来館者との出会い・交流や、仕事面での信頼というメリット、ボランティア活動や講演活動など仕事以外の活動の幅の広がりがあると答える館長などがある。

この結果より、館長としての役割を受容する過程で、仕事に対する誇りや自信を取り戻し、徐々にその効果を実感していた86～93年に比べ、93～05年は館長それぞれが自分なりの展示や交流の意義や楽しみ方を見出し、館長という役割を楽しむようになったと考えられる。

その中でも、木造建築資料館と木彫資料館の2館には、同じような特徴が見られた。

93年時には「展示面積が限られているので大きなものが飾れない。夏に子供の工作教室などできたらと思う。(木造建築:93)」 「もう少し広くして教室等も行えれば。ファクトリーショップとの共存も。(木彫:93)」といった展示希望に関するコメントが見られる。一方で、05年時にも、「小さな博物館は共通性がない。小さな博物館なのに大きいところがどんどん入ってきている。(木造建築:05)」 「各博物館に温度差があるので、時々交流する必要があるのではないか。ミニ博物館の位置づけをしっかりとっておかないと、と思う。(木彫:05)」といった全体提案に関するコメントが見られる。このように、この2館については、来館者

との交流の必要性に気づき、展示方法について明確な夢を抱き、自分の博物館だけではなく、事業全体を見渡す視野を身につけたと考えられる。年齢も比較的低いいためか、これからの事業の方向性に対して不安を感じ、区には頼らずに「自分がどうにかしなければ」という責任感を持っていると考えられる。

また、館長と区とが二人三脚で協力し合い「小さな博物館」を展開していた 86 年～93 年にかけては、各博物館を支える体制が周辺環境にまだ整っておらず、区が先導的に支援していた。館長からは、「伝統工芸の仕事の関係上、バックアップしてくれることに感謝している。(木彫:93)」や「区はよくやってくれるなあとオーナーとよく話す。(古伊万里:93)」 「もう少し手当てがないものだろうか。電気代にもならない。(能面:93)」といったコメントも見られ、金銭面での補助や名刺・パンフレットの作成、広報活動といった区の支援に対して感謝や評価、要望が多く見られた。

一方、93 年～05 年にかけては、区の支援の対象が「小さな博物館」からはずれたことや、館長に館長意識が芽生え、区の政策のためではなく、館長が館長自身のやりがいを見出し、主体的に関わるようになったことによる影響が出始めた。それは、古伊万里資料館が独自に新聞の取材を受け広報活動を行ったり、建築道具・木組資料館がイベントに出張博物館として展開したりと、区の支援を頼らずに活動するようになったということである。また、館長は独自に博物館を支援してくれるネットワークを広げることで、各博物館の自立化が進むことになった。羽子板資料館や足袋資料館のように区から受ける最低限の支援以外に支援を受けていない一部の博物館を除き、区の支援の他に、家族や社員、同業者や趣味の仲間、地域の人たちなどの協力を得ながら博物館の運営が行われるようになった。「現場主義の仕事ですし、家族の協力はある。シャッターの開け閉めだけでも助かる。区はパンフレットには力を入れてくれている。大工の仕事仲間の賛同も必要。(木造建築:05)」や「私がない場合は家内や息子に説明してもらっています。(べっ甲:05)」というようなコメントが見られる。

(3) 館長の継続意思

05 年のヒアリングにおいて、「閉館を考えたことがあるか」という質問に対して、回答を得られなかった古伊万里資料館と羽子板資料館以外の 7 館全館で「ない」という返答を得た。

その理由として、館長のコメントには、「どっちにしろ仕事場だからさ。私ひとりもんでしょ。誰か来てくれるとありがたい。特に女性とか。外で会っても声かけられないでしょ。それと、弟子が来ないかなと望みをかけているんだけど来ないね。(能面:05)」や、「宣伝兼ねてこれからも伸ばしていきたい。そういうのが好き。(建築道具:93)」といったコメントが見られた。

20 年近く博物館を運営する中で、閉館を考えたことがなく、今後も続けていく意志を持っており、館長意識が継続していることが分かる。

5-1-2 館長交代型の経過

(1) 具体的な事象の変化

小林人形資料館では、平成 12 年 7 月に一代目が死去したことで、同じく人形作り職人である実弟が二代目を引き継いでいる。しかし、現在はその二代目もリハビリ中のため、その妻が代行している。

合金鋳物博物館では、平成 10 年 3 月に運営母体であった江東区合金鋳物工業協同組合が解散した後、破棄するはずだった展示品を組合員の一人が譲り受け、個人宅で展示場を設置している。個人で運営することになり組合で運営していたときよりも、開館日を減らし、調整している。

乾燥木材工芸資料館では、平成 13 年に一代目が死去したことで、4 年間ほど一緒に活動していた大工職人でもある会社仲間が二代目を引き継いでいる。また、運営母体であった乾燥木材工芸株式会社は倒産し、現在は展示場、展示物はそのままの状態、個人の所有物となっている。

軟式野球資料室では、名義上の世代交代はないが、実際に館内の説明をする担当者は、会社の人事異動で変更する。

金庫と鍵の博物館では、まだ、名義上の世代交代はないが、一代目の体調不良のため、家業を継ぐ長男が今後二代目として博物館も引き継ぐことになっている。

なお、表 5-2 は上記の内容をまとめたものである。

表 5-2 館長交代型の世代交代の経緯

博物館名	交代の動機	引き継いだ理由
合金鋳物博物館	組合の解散	組合の解散後破棄するつもりだったが、せっかくだったので。
小林人形資料館	館長の死	—
乾燥木材工芸資料館	館長の死	一代目館長と 4 年間ほど一緒に活動をしていた。館長の意志を受け継いで。
軟式野球資料室	人事異動	仕事として。
金庫と鍵の博物館	館長の急病	家業の跡取りだから。

(2) 館長意識の変化

館長交代型に当てはまる 5 館の傾向について、館長のコメントからまとめる。

93 年時にはまったく見られなかった「体験教室を増やしたい。(乾燥木材:93)」 「骨董も趣味で集めたい。本当は火を焚いてやってみたい。(合金鋳物:93)」といった展示希望に関するコメントや、「いろいろな人と接せられるのがうれしい。(乾燥木材:05)」 「来館者と意気投合することも。(金庫と鍵:05)」といった交流愉快に関するコメントが 05 年時には見られ

る。来館者との交流については、「日本家屋が体にいいということを教えている。(乾燥木材:05)」、「子供たちが興味を持ってくれて野球を盛んにして欲しい。(軟式野球:05)」といった目的意識を持つ館長が多く、トクしたこととしては、数多くの来館者との出会い・交流が挙げられる。

これらの結果より、館長交代型の博物館には、来館者との交流を重要視する博物館が多い。また、二代目の館長には、一代目よりは上を目指そうとする館と、現状を維持しようとする館とがあることが分かる。前者は問題意識が強く、行政への要求も多く、交流の仕方にも工夫をしようとする姿が見られ、二代目としての向上心が見られる。後者は、一代目の意志を受け継いでいるが、来館者との交流については二代目独自の考え方も持っている。

また、93 年時の前館長のコメントには、区の支援に対する「文化程度を上げたいという区の気持ちが見える。(金庫と鍵:93)」といった評価や「他県・他地域への広報活動をもっと活発にしてほしい。(合金鋳物:93)」といった要望などのコメントが見られる。つまり、館長継続型の博物館と同様に、86 年から 93 年にかけて、区の支援を受け、その後、徐々に区の支援に頼らず、館長自身の特徴のある博物館を作り上げていったと考えられる。一方、現館長は、前館長時代に博物館を支援する基盤ができていたため、支援してくれる周辺環境もセットで博物館を引き継いだと考えられる。また、「社員もこの博物館の存在を知っている。(軟式野球:05)」や「地域の人は黙っていても知っていてくれる。(乾燥木材:05)」というコメントから、博物館という存在が社員や地域の人から理解され、社内や地域の中で浸透し、館長の頑張りが周囲の人たちに認めてもらえることは、博物館の支えになっていると考えられる。

(3) 世代交代の経緯

世代交代を経験した以下の 5 館について、93 年の考えと、実際の館長交代の仕方について注目したい。

まず、軟式野球資料館と金庫と鍵の博物館の 2 館については、93 年に一代目の館長が考えていた通りに博物館の引き継ぎが行われた。他の 3 館については、実際に交代はできたが、93 年には「後継者はいない。だからこういうような形にした。後継者が捨てちゃわないかという恐れのためにこうした。しかるべきところに寄付したい。この代で終わるでしょう。(小林人形:93)」や、「後継者がいれば続けて欲しい。(合金鋳物:93)」といったコメントが見られ、93 年には博物館の引き継ぎの準備体制は整っていなかったと考えられる。しかし、ここで共通することは、二代目は、一代目の時代に一代目と仕事上の弟子あるいは親子、仲間という関係であり、一代目をサポートする環境に身を置いていたということである。一代目の博物館の引き継ぎの意志に関係なく、二代目が同時期に博物館の運営に関わることで、徐々に博物館を引き継ぐ準備体制を整えていったと考えられる。よって、世代交代には館長と一緒に活動する時期を経験した館長の代理的な存在が必要であると考

えられる。

次に、現館長の博物館の引き継ぎについてのコメントを見ると、「特には考えていない。(小林人形:05)」、「一応は考えている。なかなかいないけど。時代もどうなるか分からないし。(乾燥木材:05)」や、「おしまいだ。友達が一人いて、名目上副館長。76歳で現役でやっている。ふたりでやっているうちは何とかなるだろう。家族は無理。(合金鋳物:05)」といったコメントが目立つ。現在は、一緒に博物館を運営する弟子や仲間もおらず、一度目の交代時とは状況が異なるため、次の博物館への引き継ぎは困難であると考えられる。

5-1-3 閉館型の経過

閉館したのは、はんこ資料館をはじめとする8館である。はんこ資料館、ライター資料館の閉館理由については情報を得られなかったが、その他の博物館の閉館理由は以下のとおりである(表5-3)。

表5-3 閉館時期と閉館理由

博物館名	開館時期	閉館理由
はんこ資料館	1987.5.11～1995.1.31	—
NTTブリキのおもちゃ博物館	1987.5.11～1995.12.31	持ち主の展示物の回収。
石材資料館	1988.3.29～1996.8.20	会社の倒産。
硝子の本の博物館	1989.3.3～1997.3.31	スタッフへの給料による負担。
千社札博物館	1986.6.27～1997.3.31	館長の死去。息子は本業に影響。
タキナミグラス博物館	1986.6.27～2001.10.21	会社の倒産。
ライター博物館	1988.3.29～2002.11.5	—
伝統木彫刻資料館	1990.3.15～2005	館長の死去。後継者なし。

NTTブリキのおもちゃ博物館は、個人が所有するコレクションをNTTの事業所内にて展示を行っていたが、コレクションの持ち主から展示物の回収を求められたため閉館した。

石材資料館とタキナミグラス博物館は、運営母体である会社が倒産したことが原因で閉館した。タキナミグラス博物館は、会社自体を改築し博物館仕様にしたにもかかわらず、本業の硝子部門が倒産したため、このような結果となった。

硝子の本の博物館は、会社も展示物も存続しているが、博物館の管理を担当するスタッフ(館長も含む)への給料が負担になるという理由から閉館した。

千社札博物館と伝統木彫刻資料館では、一代目館長の死去が理由で閉館した。2館とも息子がいるが、千社札博物館は、本業に差し支えるという理由で、また、伝統木彫刻資料館は、サラリーマンをしているので無理という理由で、それぞれ閉館した。

5-2 章のまとめ

館長継続型においては、館長それぞれに博物館に対する思い入れが多様化し、全体的に館長と来館者との交流形態における多様化が進んでいる。館長自身が楽しめる、またやりがいを感じることができる博物館が形成される中で、館長意識も形成、そして維持されてきたことが分かった。

各博物館の世代交代の経緯や閉館した博物館の中に、「館長意識の消失・低下」という理由によって世代交代や閉館をした事例がない。つまり、「小さな博物館」の場合、博物館の世代交代や閉館には館長意識の継続よりも、展示物、館長の後継者、運営母体の存続の問題といった、館長にはどうすることもできない外部から受ける影響の方が関係しているということが分かった。

なお、館長交代型の特徴から、博物館の引き継ぎ期間が必要であることも分かったが、あくまでも、展示物、館長の後継者、運営母体の存続が前提の上での話である。

第5章の内容を受けて、第6章では、一つ目に、20年間の館長意識の形成、維持における影響要因を解明するために、館長意識の継続性に関する分析を、二つ目に、世代交代に関する分析の2点について試みる。